

# 1. 平成18年水質調査結果の概要

## (1) 生活環境の保全に関する環境基準の満足状況

平成18年は、BOD（またはCOD）値が環境基準を満足している地点の割合は87%で、過去最高だった平成15年～17年の88%と同程度であった。

一級河川（湖沼及び海域を含む。）において、生活環境の保全に関する環境基準項目のうち、BOD（生物化学的酸素要求量）またはCOD（化学的酸素要求量）の環境基準を満足している地点の割合の経年変化をみると、過去最高だった平成15年～17年の88%と同程度の87%の地点（881地点/1,007地点）において環境基準を満足している（図-1参照）。

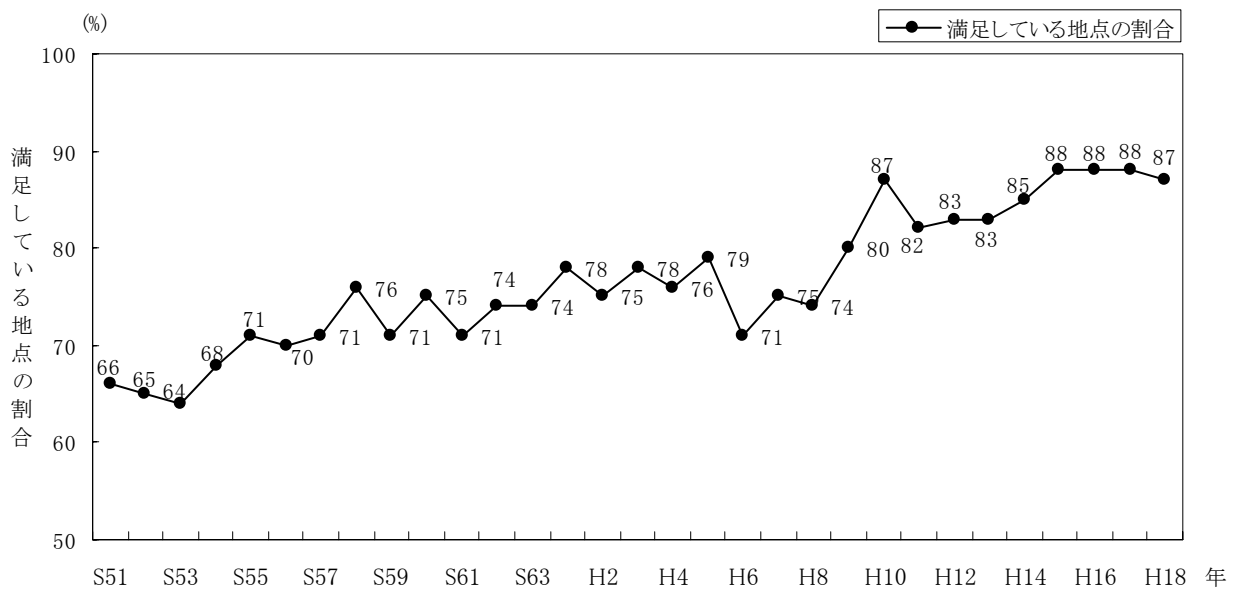


図-1 一級河川（湖沼及び海域を含む。）において環境基準を満足している地点の割合

(2) 調査地点の水質状況

平成18年は、河川における調査地点の約93%で、サケやアユが生息できる良好な水質を維持している。

平成18年の河川（ダム貯水池を除く。）における調査地点のうち、サケやアユが生息できる良好な水質（BOD75%値が3.0mg/ℓ以下）を満足している地点の割合は平成17年と同程度の92.6%(852地点/920地点)であった（図-2参照）。

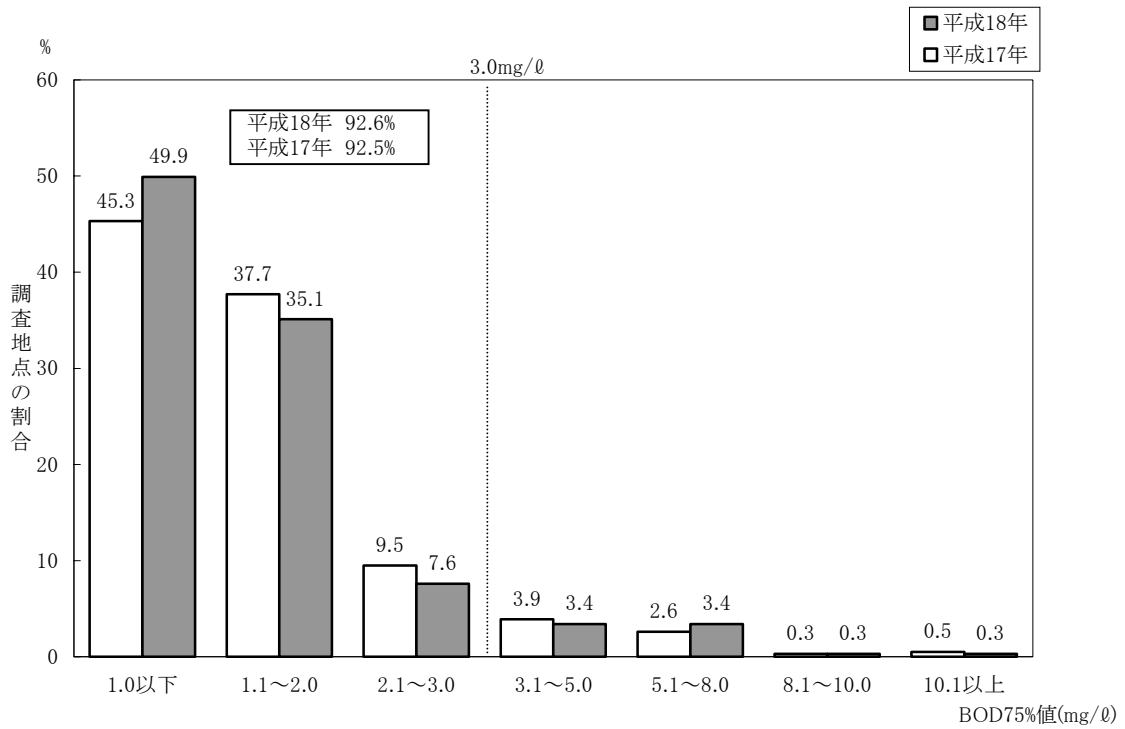


図-2 BOD75%値ランク別割合（河川）

### (3) 人と川のふれあいからみた水質状況

平成18年は、調査地点の約8割の地点が、水遊びができる目安とされる水浴場判定基準により「適」または「可」と判定された。

河川、湖沼等（湖沼、海域及びダム貯水池）の調査地点（988地点）における糞便性大腸菌群数について、人と川のふれあいの観点から、水浴場判定基準（環境省）により判定したところ、遊泳が「適」とされる100個/100ml以下の割合は39.5%（390地点/988地点）で、平成17年と同程度であった。また、「可」とされる101～1,000個/100mlをあわせると80.2%（792地点/988地点）となり、平成17年を2.6ポイント下回った（図-3参照）。

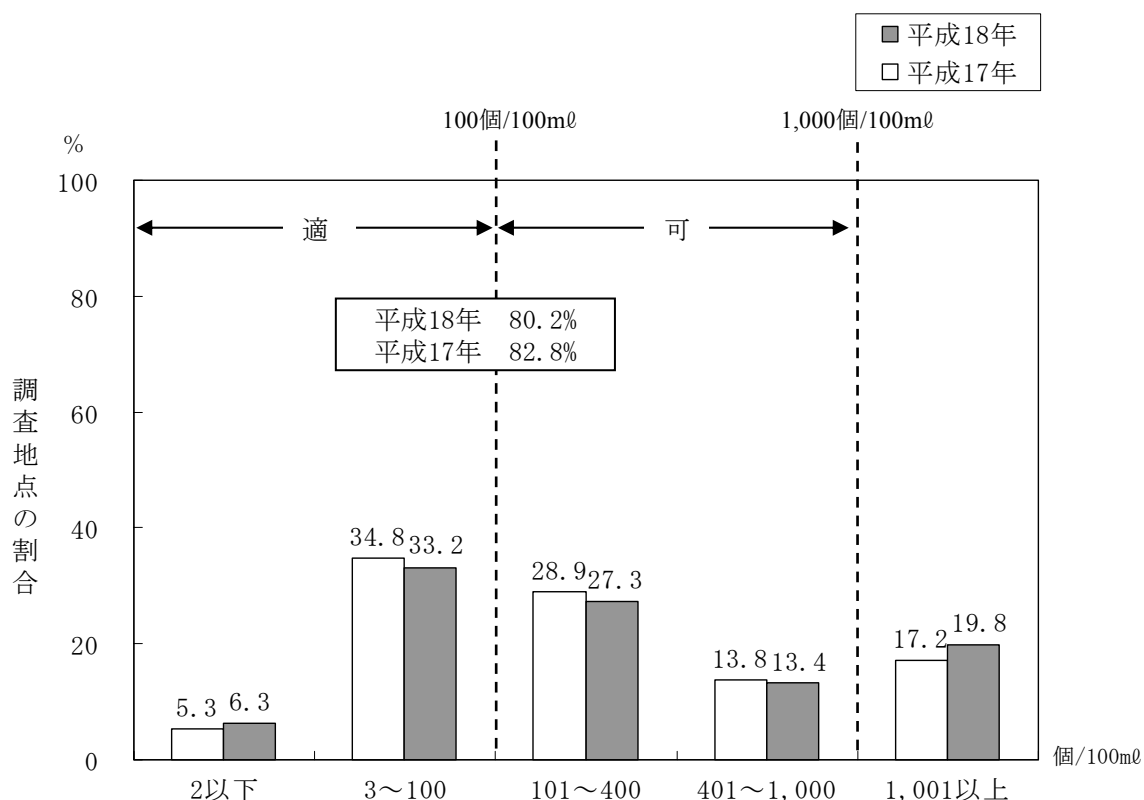


図-3 糞便性大腸菌群数（年平均値）のランク別割合  
注) 湖沼等については表層

#### (4) ダイオキシン類からみた水質状況

平成18年度は、ダイオキシン類の調査地点の約98%が、環境基準を満足しており、約94%が要監視濃度（環境基準値の1/2）以下であった。

平成11年度から、「ダイオキシン類対策特別措置法」で定義されているダイオキシン類について、全国一級水系で継続的に水質と底質の調査を実施している。

これまでのダイオキシン類の水質調査結果は図-4に示すとおり、9割以上の地点が、環境基準（1.0pg-TEQ/l）を満足し、要監視濃度（0.5pg-TEQ/l）以下となっている。

平成18年度についても、約98%（219地点/224地点）が、環境基準を満足しており、約94%（210地点/224地点）が要監視濃度以下であった。また、底質調査については、全ての地点で環境基準を満足し、要監視濃度以下であった。

なお、内分泌かく乱物質として疑いのある物質（注）についても全国一級水系で水質と底質の調査を行った。

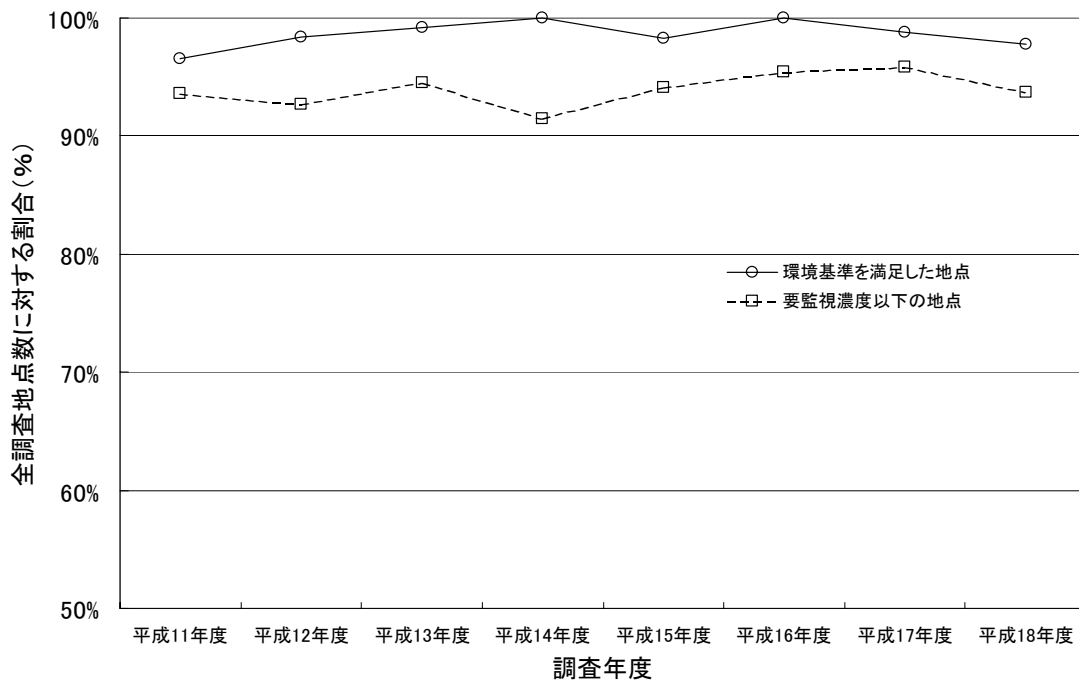


図-4 ダイオキシン類の水質調査で環境基準を満足した地点及び要監視濃度以下の地点の割合の推移

(注) 内分泌系に影響を及ぼすことにより、生体に障害や有害な影響を引き起こす外因性の化学物質。

## 2. 水質事故等の状況

水質事故の発生件数としては増加傾向にあるが、上水道の取水停止を伴う大規模事故の発生件数は横這いである。

水質事故の発生件数は年々増加して平成18年には1,500件を超えた。近年、住民等から寄せられる事故情報が増加していること等の結果と考えられる。

一方、上水道の取水停止を伴う重大な事故の発生件数は38件であった（図-5参照）。

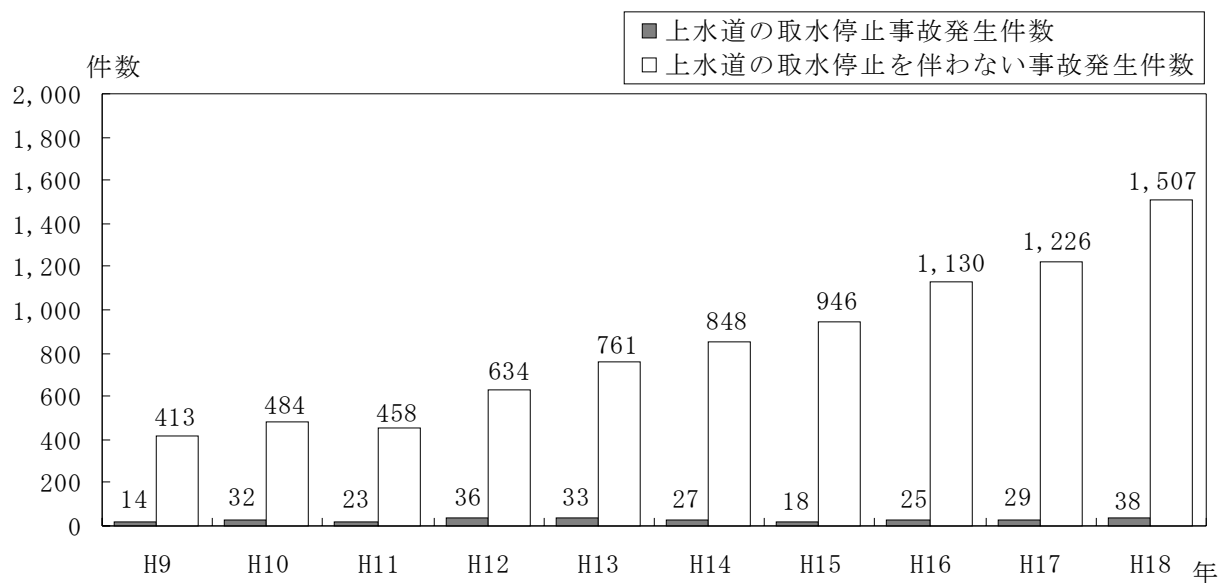


図-5 水質事故発生件数と上水道の取水停止事故発生件数の推移

### 3. 平成18年河川ランキング

- 河川毎に、平成18年の平均水質及び過去10年間の水質改善状況によるランキング並びに平成18年の環境基準の満足状況について評価する。
  - 以下の条件を満たす166河川を対象とする。
    - 一級河川本川：直轄管理区間に調査地点<sup>注)</sup>が2以上ある河川。
    - 一級河川支川：直轄管理区間延長が概ね10km以上、かつ直轄管理区間に調査地点<sup>注)</sup>が2以上ある河川。
- 注) 湖沼類型指定、海域類型指定の調査地点は含まない。  
ダム貯水池は原則として調査地点に含まない。

(1) 平均水質によるランキング

BOD値による河川平均水質が上位（各調査地点のBOD平均値の平均（同じ値の場合はBOD75%値の平均）が小さい）の河川は表-1のとおりである。尻別川、沙流川は3年連続、後志利別川、鷓川は2年連続で1位となった。また、宮川は2年ぶり、黒部川、安倍川は8年ぶりに、高津川では初めて1位になった。川辺川は今年からとりまとめ対象となり、1位になった。

なお、平成18年においてBOD平均値が、人の手が入っていない河川並の水質とされる1.0mg/ℓ未満の河川は92河川あり、対象河川の55%を占めている。これらの河川はいずれも同程度に清浄な河川といえる。

表-1 BOD値による河川の水質状況（水質上位河川）

年	順位	地方名／河川名（水系名）	都道府県名	BOD (mg/ℓ)	
				平均値	(75%値)
平成18年	1	北海道／ <small>しりべつがわ</small> 尻別川（ <small>しりべつがわすいけい</small> 尻別川水系）	北海道	0.5	(0.5)
		北海道／ <small>しりべしとしべつがわ</small> 後志利別川（ <small>しりべしとしべつがわすいけい</small> 後志利別川水系）	北海道		
		北海道／ <small>むかわ</small> 鷓川（ <small>むかわすいけい</small> 鷓川水系）	北海道		
		北海道／ <small>さるがわ</small> 沙流川（ <small>さるがわすいけい</small> 沙流川水系）	北海道		
		北陸／ <small>くろべがわ</small> 黒部川（ <small>くろべがわすいけい</small> 黒部川水系）	富山		
		中部／ <small>あべかわ</small> 安倍川（ <small>あべかわすいけい</small> 安倍川水系）	静岡		
		中部／ <small>みやがわ</small> 宮川（ <small>みやがわすいけい</small> 宮川水系）	三重		
		中国／ <small>たかつがわ</small> 高津川（ <small>たかつがわすいけい</small> 高津川水系）	島根		
九州／ <small>かわべがわ</small> 川辺川（ <small>くまがわすいけい</small> 球磨川水系）	熊本				
平成17年	1	北海道／ <small>しりべつがわ</small> 尻別川（ <small>しりべつがわすいけい</small> 尻別川水系）	北海道	0.5	(0.5)
		北海道／ <small>しりべしとしべつがわ</small> 後志利別川（ <small>しりべしとしべつがわすいけい</small> 後志利別川水系）	北海道		
		北海道／ <small>むかわ</small> 鷓川（ <small>むかわすいけい</small> 鷓川水系）	北海道		
		北海道／ <small>さるがわ</small> 沙流川（ <small>さるがわすいけい</small> 沙流川水系）	北海道		
		北海道／ <small>さつないがわ</small> 札内川（ <small>とかがわすいけい</small> 十勝川水系）	北海道		
		北陸／ <small>あらかわ</small> 荒川（ <small>あらかわすいけい</small> 荒川水系）	新潟		

一方、BOD値による河川平均水質が下位（各調査地点のBOD平均値の平均（同じ値の場合はBOD75%値の平均）が大きい）の5河川は、表-2のとおりである。平成17年と順位は異なるものの同一の河川である。

図-6に示すとおり、大和川や鶴見川で平成17年の水質に比べ改善が見られる一方、中川は平成17年の水質に比べ悪化が見られた。

表-2 BOD値による河川の水質状況（水質下位5河川）

年	順位	地方名／ 河川名（水系名）	都道府県名	BOD (mg/ℓ)	
				平均値	(75%値)
平成18年	1	近畿 / やまとがわ 大和川 (大和川水系)	大阪、奈良	4.7	(5.5)
	2	関東 / あやせがわ 綾瀬川 (利根川水系)	埼玉、東京	4.6	(5.5)
	3	関東 / つるみがわ 鶴見川 (鶴見川水系)	神奈川	4.3	(4.8)
	4	関東 / なかがわ 中川 (利根川水系)	埼玉、東京	4.2	(4.8)
	5	近畿 / いながわ 猪名川 (淀川水系)	大阪、兵庫	3.4	(4.2)
平成17年	1	近畿 / やまとがわ 大和川 (大和川水系)	大阪、奈良	6.4	(7.9)
	2	関東 / つるみがわ 鶴見川 (鶴見川水系)	神奈川	4.7	(6.0)
	3	関東 / あやせがわ 綾瀬川 (利根川水系)	埼玉、東京	4.7	(5.6)
	4	関東 / なかがわ 中川 (利根川水系)	埼玉、東京	3.7	(4.3)
	5	近畿 / いながわ 猪名川 (淀川水系)	大阪、兵庫	3.5	(4.0)

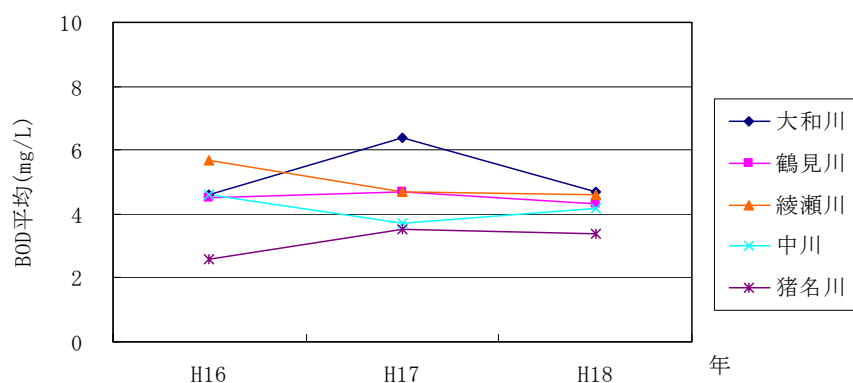


図-6 平成17年、平成18年の平均水質ランキング下位河川の水質の推移



(2) 過去10年間の水質改善状況によるランキング

平成17年と平成18年の2ヶ年の河川毎のBOD値の平均と、平成7年と平成8年の2ヶ年の河川毎のBOD値の平均から、10年間の水質改善幅による河川の水質改善状況を比較した。

数値が大きいほど10年間で水質改善が図られたことを示す。

表-3は、2ヶ年平均の水質改善幅の大きい上位5河川である。図-12には水質改善状況上位5河川の水質の改善傾向を示す。特に平成18年の河川平均水質ランキングが下位の綾瀬川、大和川及び鶴見川で大幅に水質が改善されている状況が見られる。これは、過去10年間に於ける下水道整備の進展や河川浄化事業（礫間接触酸化等）の実施等、流域における取り組みによるものと考えられる。

表-3 2ヶ年平均BOD値の改善幅による10年間の水質改善状況(上位5河川)

順位	地方名/河川名(水系名)	都道府県名	平成7、8年 BOD平均値 (mg/l)	平成17、18年 BOD平均値 (mg/l)	2ヶ年平均 水質改善幅 (mg/l)
1	関東/綾瀬川(利根川水系) <small>あやせがわ とねがわすいけい</small>	埼玉、東京	9.8	4.7	5.1
2	近畿/大和川(大和川水系) <small>やまとがわ やまとがわすいけい</small>	大阪、奈良	10.4	5.6	4.8
3	関東/鶴見川(鶴見川水系) <small>つるみがわ つるみがわすいけい</small>	神奈川	7.9	4.5	3.4
4	四国/重信川(重信川水系) <small>しげのぶがわ しげのぶがわすいけい</small>	愛媛	2.9	1.1	1.8
5	東北/笹川(名取川水系) <small>ざるかわ なとりがわすいけい</small>	宮城	2.6	1.0	1.6
5	関東/多摩川(多摩川水系) <small>たまがわ たまがわすいけい</small>	東京、神奈川	3.3	1.7	1.6
5	北陸/関川(関川水系) <small>せきかわ せきかわすいけい</small>	新潟	2.7	1.1	1.6

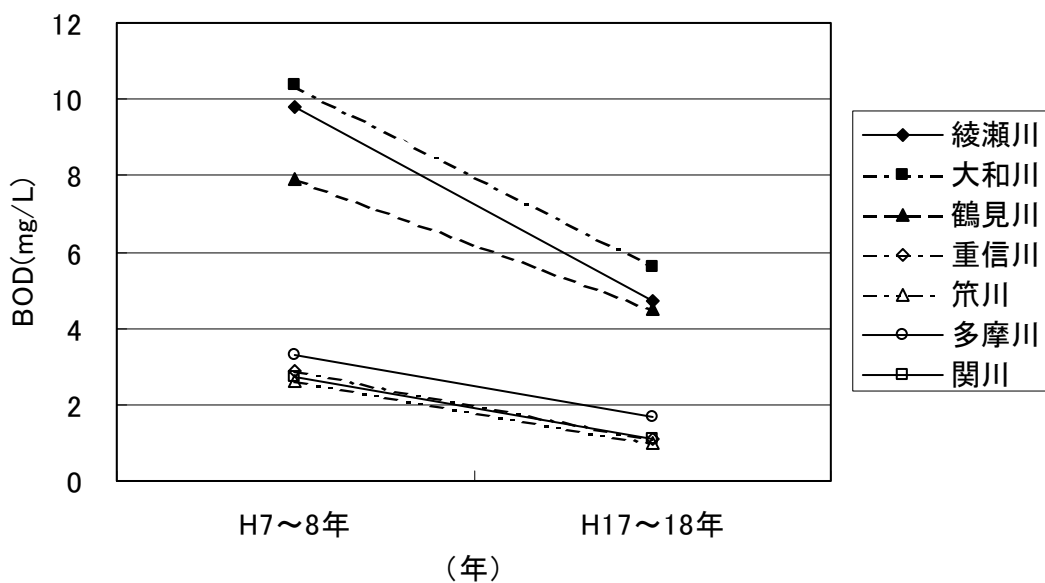


図-7 水質改善状況上位5河川の10年間の水質傾向

(3) 環境基準の満足状況

環境基準の類型は、河川毎にその状況等を踏まえ、水質に関して目指す姿として指定される。水質改善は環境基準を満足することを目標に取り組まれる。

対象河川のうち164河川で環境基準の類型指定がなされており、139河川では全ての調査地点で環境基準を満足している（表-4、参考資料3. 参照）。環境基準を満足していない調査地点のある25河川については、平均水質は良好であるが、一部の調査地点の水質のみが環境基準を満足できていない河川が多い。

なお、厳しい環境基準の類型指定をしている場合、BOD値が比較的低くても環境基準を満足できていない河川がある。

表-4 環境基準を満足していない調査地点のある河川一覧

環境基準を満足している調査地点の割合	河川数	地方名／河川名（水系名）	都道府県名
100%満足	139河川	—	—
80%以上 100%未満	7河川	関東 / 小貝川 (利根川水系) <86% 関東 / 富士川 (富士川水系) <86% 関東 / 多摩川 (多摩川水系) <85% 中部 / 矢作川 (矢作川水系) <83% 関東 / 那珂川 (那珂川水系) <83% 関東 / 渡良瀬川 (利根川水系) <83% 四国 / 重信川 (重信川水系) <80%	茨城、栃木 山梨、静岡 東京、神奈川 愛知 茨城、栃木 群馬、茨城、栃木 愛媛
60%以上 80%未満	11河川	関東 / 荒川 (荒川水系) <77% 関東 / 鶴見川 (鶴見川水系) <75% 関東 / 笛吹川 (富士川水系) <75% 中国 / 日野川 (日野川水系) <75% 中国 / 芦田川 (芦田川水系) <71% 関東 / 烏川 (利根川水系) <67% 関東 / 利根川 (利根川水系) <67% 中部 / 大井川 (大井川水系) <67% 近畿 / 猪名川 (淀川水系) <67% 四国 / 土器川 (土器川水系) <67% 関東 / 中川 (利根川水系) <60%	埼玉、東京 神奈川 山梨 鳥取 広島 群馬 茨城、群馬、千葉、埼玉 静岡 大阪、兵庫 香川 埼玉、東京
40%以上 60%未満	5河川	北海道 / 十勝川 (十勝川水系) <50% 北陸 / 信濃川 (信濃川水系) <50% 関東 / 荒川 (荒川水系) <50% 近畿 / 新宮川 (新宮川水系) <50% 四国 / 渡川 (渡川水系) <50%	北海道 長野 埼玉 三重、和歌山 高知
40%未満	2河川	近畿 / 大和川 (大和川水系) <38% 関東 / 綾瀬川 (利根川水系) <33%	大阪、奈良 埼玉、東京
類型未指定	2河川	—	—
合計	166河川		

<>内は各河川における環境基準を満足している調査地点の割合

#### 4. 平成18年新しい水質指標による調査結果の概要

##### (1) 新しい水質指標による調査について

1. (1) で示すように、近年、一級河川のBOD（またはCOD）値が環境基準を満足している地点の割合は8割を超えており、水質の改善は進んでいる。一方、水質改善に伴い、人々が河川とふれあう機会が増え、河川の多様な生態系に対する関心が高まるなど、BODだけでなく多様な視点で河川が捉えられるようになってきている。

そこで、国土交通省では、河川をBODだけでなく多様な視点で評価するための指標について検討し、「今後の河川水質管理の指標について（案）」を平成17年3月にとりまとめた。今後の河川水質管理の指標（以降、「新しい水質指標」と呼ぶ）は、表-5～表-7に示すように、人と河川の豊かなふれあいの確保、豊かな生態系の確保、利用しやすい水質の確保などの視点からなり、特に、赤枠内の項目については、住民と河川管理者とが協働で調査することとしている。

表-5 人と河川の豊かなふれあいの確保（赤枠内は住民と協働調査）




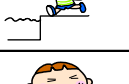
ランク	説明	ランクのイメージ	評価項目と評価レベル				
			ゴミの量	透視度 (cm)	川底の感触	水のおい	
A	顔を川の水につけやすい		川の中や水際にゴミは見あたらないまたは、ゴミはあるが全く気にならない	100以上	不快感がない	不快でない	100以下
B	川の中に入って遊びやすい		川の中や水際にゴミは目につくが、我慢できる	70以上	とところころヌルヌルしているが、不快でない	水に鼻を近づけて不快な臭いを感じる 風下の水際に立つと不快な臭いを感じる	1000以下
C	川の中には入れないが、川に近づくことができる		川の中や水際にゴミがあって不快である	30以上	ヌルヌルしており不快である		
D	川の水に魅力がなく、川に近づきにくい		川の中や水際にゴミがあってとても不快である	30未満		風下の水際に立つと、とても不快な臭いを感じる	

表-6 豊かな生態系の確保（赤枠内は住民と協働調査）

ランク	説明	評価項目と評価レベル		
		DO (mg/L)	NH <sub>4</sub> -N (mg/L)	水生生物の生息
A	生物の生息・生育・繁殖環境として非常に良好	7以上	0.2以下	I. きれいな水 ・カワゲラ ・ナガレトビケラ等
B	生物の生息・生育・繁殖環境として良好	5以上	0.5以下	II. 少しきたない水 ・コガタシマトビケラ ・オオシマトビケラ等
C	生物の生息・生育・繁殖環境として良好とは言えない	3以上	2.0以下	III. きたない水 ・ミズムシ ・ミズカマキリ等
D	生物が生息・生育・繁殖しにくい	3未満	2.0を超えるもの	IV. 大変きたない水 ・セスジユスリカ ・チョウバエ等

表-7 利用しやすい水質の確保

ランク	説明	評価項目と評価レベル			
		安全性	快適性		維持管理性
		トリハロメタン生成能 (μg/L)	2-MIB (ng/L)	ジオスミン (ng/L)	NH <sub>4</sub> -N (mg/L)
A	より利用しやすい	100以下	5以下	10以下	0.1以下
B	利用しやすい		20以下	20以下	0.3以下
C	利用するためには高度な処理が必要	100を超えるもの	20を超えるもの	20を超えるもの	0.3を超えるもの

この新しい水質指標による調査は、平成17年に初めてほぼ全ての一級水系の直轄管理区間を対象に試験的に実施し、平成18年には全ての一級河川を対象に本格的に実施した。

平成18年は、人と河川の豊かなふれあいの視点については全国302地点で調査を行い、このうち、242地点の調査に一般市民が参加した。豊かな生態系の視点については全国303地点で調査を行い、このうち、243地点の調査に一般市民が参加した。また、利用しやすい水質の確保については全国156地点で調査を実施した。

## (2) BOD平均水質による河川ランキングと新しい水質指標による評価

3. (1) で示した平成18年のBOD平均水質による河川ランキングの上位河川と下位河川について、新しい水質指標による調査結果を元に評価した結果を表-8、表-9に示した。

上位河川については、ほとんどの項目でAランクとなっており、BOD以外の視点からも概ね良好な河川であることが分かった。一方、尻別川や黒部川のように、人と河川の豊かなふれあいの確保の視点で評価すると、川底の感触や透視度、水のおいなど評価ランクが低い項目もあることがわかった。

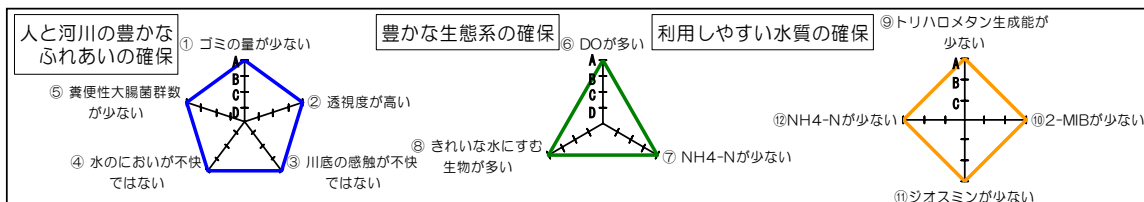
下位河川については、評価ランクが低い項目が目立ったが、例えば猪名川のように、全ての項目がAあるいはBランクであり、人と河川の豊かなふれあいや豊かな生態系、利用しやすい水質の確保という視点からは良好な地点もあることが分かった。

一方、新しい水質指標の「人と河川の豊かなふれあいの確保」の視点から見た場合、Aランク評価を有する河川のBOD平均水質ランキングをみると図-8のようになっており、BOD平均水質ランキングが上位でなくても「人と河川の豊かなふれあいの確保」の視点からは良好な地点があることが分かった。

表-8(1) 平成18年のBOD平均水質による上位河川の新しい水質指標による評価

順位	地方名/河川名 (水系名)	都道府県名	BOD (mg/l)		新しい水質指標による評価			
			平均値	(75%値)	人と河川の豊かなふれあいの確保	豊かな生態系の確保	利用しやすい水質の確保	
1	北海道/尻別川 (尻別川水系)	北海道	0.5	(0.5)			※未測定	
	北海道/後志利別川 (後志利別川水系)	北海道						
	北海道/鷗川 (鷗川水系)	北海道					(瑠璃橋) ※未測定	
	北海道/沙流川 (沙流川水系)	北海道					※未測定	
	北陸/黒部川 (黒部川水系)	富山					※未測定	

※黒部川の⑧(きれいな水にすむ生物が多い)は、A、C、Dランクに該当する生物が同数であったためDランクとした。



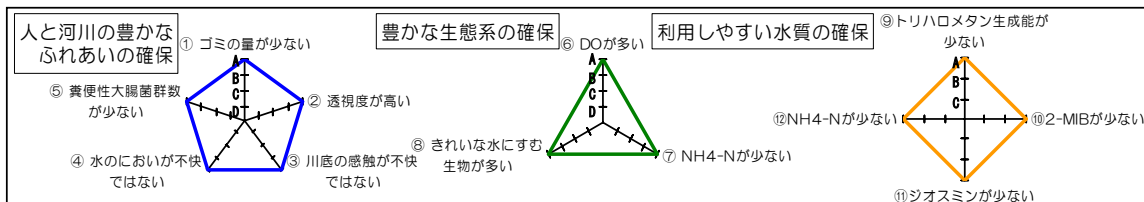
※新しい水質指標による評価について

- ① それぞれの項目について、Aが最も良い評価ランクです。
- ② 「人と河川の豊かなふれあいの確保」では、河川水質を親水性や景観の観点も加味して調査した結果です。また、「豊かな生態系の確保」では、河川水質を水生生物の生息環境の観点も加味して、「利用しやすい水質の確保」では、河川水質を水道水への利用のしやすさの観点も加味して調査した結果です。
- ③ 「人と河川の豊かなふれあいの確保」と「豊かな生態系の確保」では、地域住民と河川管理者が協働して調査を実施しています(一部の水質項目は河川管理者のみで実施しています)。
- ④ 河川の水質を評価したものであり、その地点への近づき易さや河川形態などは評価の対象になっていません。
- ⑤ 「人と河川の豊かなふれあいの確保」では、においや感触など、個人差が生じる項目も含んだ結果です。
- ⑥ 「利用しやすい水質の確保」は、水道水源としての利用しやすさを評価する指標項目であることから、主に上水道取水がある水域を調査対象範囲としました。

表-8(2) 平成18年のBOD平均水質による上位河川の新しい水質指標による評価

順位	地方名/河川名 (水系名)	都道府県名	BOD (mg/l)		新しい水質指標による評価		
			平均値	(75%値)	人と河川の豊かなふれあいの確保	豊かな生態系の確保	利用しやすい水質の確保
1	中部/安倍川 (安倍川水系)	静岡	0.5	(0.5)			
	中部/宮川 (宮川水系)	三重					
	中国/高津川 (高津川水系)	島根					※未測定
	九州/川辺川 (球磨川水系)	熊本			※未測定	※未測定	※未測定

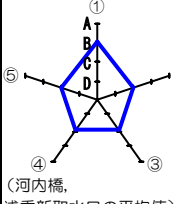
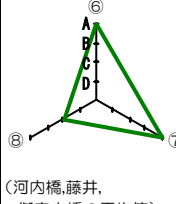
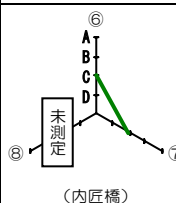
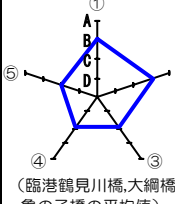
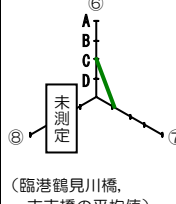
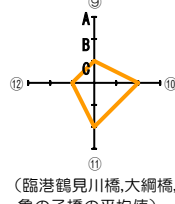
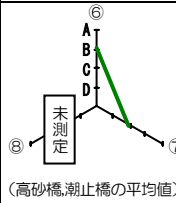
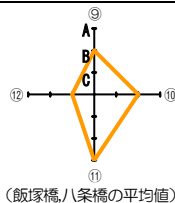
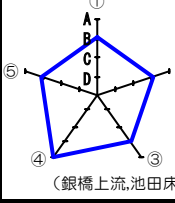
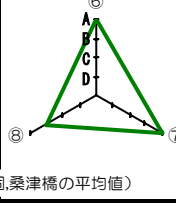
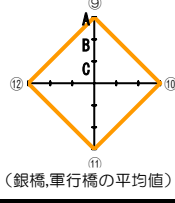
※球磨川水系は、球磨川本川でのみ調査を実施。

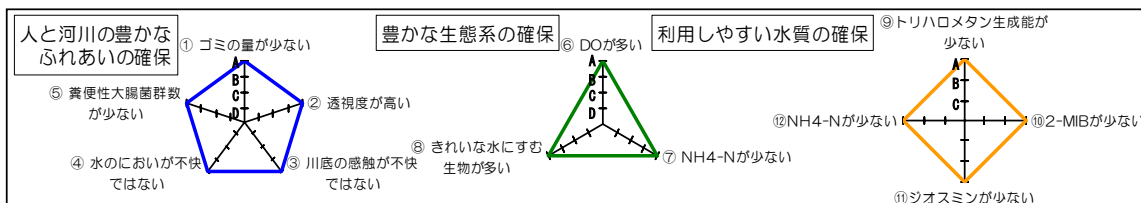


※新しい水質指標による評価について

- ①それぞれの項目について、Aが最も良い評価ランクです。
- ②「人と河川の豊かなふれあいの確保」では、河川水質を親水性や景観の観点も加味して調査した結果です。また、「豊かな生態系の確保」では、河川水質を水生生物の生息環境の観点も加味して、「利用しやすい水質の確保」では、河川水質を水道水への利用のしやすさの観点も加味して調査した結果です。
- ③「人と河川の豊かなふれあいの確保」と「豊かな生態系の確保」では、地域住民と河川管理者が協働して調査を実施しています（一部の水質項目は河川管理者のみで実施しています）。
- ④河川の水質を評価したものであり、その地点への近づき易さや河川形態などは評価の対象になっていません。
- ⑤「人と河川の豊かなふれあいの確保」では、においや感触など、個人差が生じる項目も含んだ結果です。
- ⑥「利用しやすい水質の確保」は、水道水源としての利用しやすさを評価する指標項目であることから、主に上水道取水がある水域を調査対象範囲としました。

表-9 平成18年のBOD平均水質による下位河川の新しい水質指標による評価

順位	地方名/河川名 (水系名)	都道府県名	BOD (mg/l)		新しい水質指標による評価		
			平均値	(75%値)	人と河川の豊かなふれあいの確保	豊かな生態系の確保	利用しやすい水質の確保
1	近畿/大和川 (大和川水系)	大阪 奈良	4.7	(5.5)	 (河内橋, 浅香新取水口の平均値)	 (河内橋, 藤井, 御幸大橋の平均値)	※未測定
2	関東/綾瀬川 (利根川水系)	埼玉 東京	4.6	(5.5)	調査未実施	 (内匠橋)	※未測定
3	関東/鶴見川 (鶴見川水系)	神奈川	4.3	(4.8)	 (臨港鶴見川橋, 大綱橋, 亀の子橋の平均値)	 (臨港鶴見川橋, 末吉橋の平均値)	 (臨港鶴見川橋, 大綱橋, 亀の子橋の平均値)
4	関東/中川 (利根川水系)	埼玉 東京	4.2	(4.8)	調査未実施	 (高砂橋, 潮止橋の平均値)	 (飯塚橋, 八条橋の平均値)
5	近畿/猪名川 (淀川水系)	大阪 兵庫	3.4	(4.2)	 (銀橋上流, 池田床固, 桑津橋の平均値)		 (銀橋, 軍行橋の平均値)



※新しい水質指標による評価について

- ①それぞれの項目について、Aが最も良い評価ランクです。
- ②「人と河川の豊かなふれあいの確保」では、河川水質を親水性や景観の観点も加味して調査した結果です。また、「豊かな生態系の確保」では、河川水質を水生生物の生息環境の観点も加味して、「利用しやすい水質の確保」では、河川水質を水道水への利用のしやすさの観点も加味して調査した結果です。
- ③「人と河川の豊かなふれあいの確保」と「豊かな生態系の確保」では、地域住民と河川管理者が協働して調査を実施しています（一部の水質項目は河川管理者のみで実施しています）。
- ④河川の水質を評価したものであり、その地点への近づき易さや河川形態などは評価の対象となっておりません。
- ⑤「人と河川の豊かなふれあいの確保」では、においや感触など、個人差が生じる項目も含んだ結果です。
- ⑥「利用しやすい水質の確保」は、水道水源としての利用しやすさを評価する指標項目であることから、主に上水道取水がある水域を調査対象範囲としました。



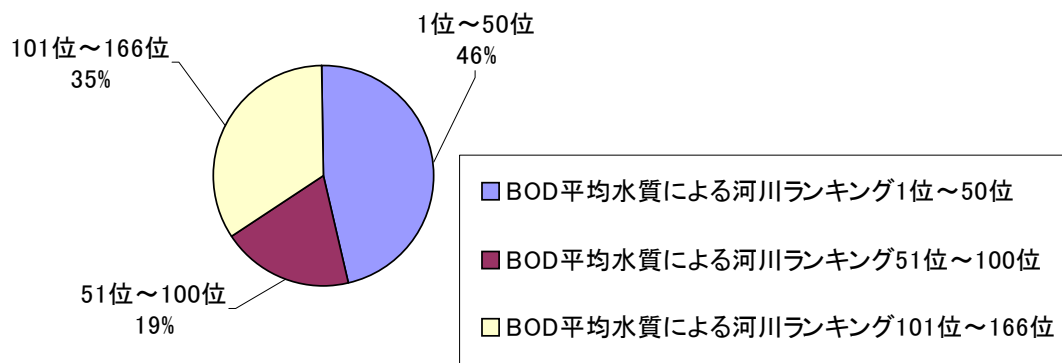


図-8 「人と河川の豊かなふれあいの確保」でAランク評価を有する河川のBOD平均水質ランキング

### (3) 新しい水質指標による全国の調査地点の総合評価マップ

平成18年に実施した新しい水質指標による調査結果を元に、人と河川の豊かなふれあいの確保、豊かな生態系の確保、利用しやすい水質の確保の3つの視点別に、全国の調査地点の総合的な評価（※）を行い、総合評価ランクを全国マップ（図-9～図-11）に示した。

評価ランクが最も高いAランク（青丸）の地点は、表-10に示すように、人と河川の豊かなふれあいの確保の視点については約17%（51地点/302地点）、豊かな生態系の確保の視点については約59%（180地点/303地点）、利用しやすい水質の確保の視点については約69%（107地点/156地点）となった。

一方、評価ランクが最も低いDランク（赤丸）の地点は、表-10に示すように、人と河川の豊かなふれあいの確保の視点については約5%（16地点/302地点）、豊かな生態系の確保の視点については約2%（7地点/303地点）となった。また、利用しやすい水質の確保では評価ランクが最も低いCランク（黄色丸）の地点は、約18%（28地点/156地点）となった。

※A～Dランクの4段階（利用しやすい水質の確保はA～Cランクの3段階）の項目別評価ランクを決めた上で、基本的には最も低い項目別評価ランクをその地点の総合評価ランクとした。



表-10 新しい水質指標による総合評価ランク別の地点数

	人と河川の豊かなふれあい		豊かな生態系		利用しやすい水質	
	地点数	割合	地点数	割合	地点数	割合
Aランク	51	16.9%	180	59.4%	107	68.6%
Bランク	131	43.4%	87	28.7%	21	13.5%
Cランク	104	34.4%	29	9.6%	28	17.9%
Dランク	16	5.3%	7	2.3%		
計	302	100%	303	100%	156	100%

※四捨五入による端数処理のため内訳の合計が100%にならないことがある。

※「人と河川の豊かなふれあいの確保」では、調査前の降雨による水の濁りやゴミの流下により評価ランクが低くなった地点も一部ある。

これらの最低ランクの地点については、総合評価ランクだけでなく、項目別評価ランクをレーダーチャートで示した（図-9～図-11）。

人と河川の豊かなふれあいの確保については、北海道の石狩川水系石狩川の永山橋地点のように一部の項目の評価ランクのみが低い地点がある一方で<sup>注1</sup>、関東の利根川水系利根川の木下地点<sup>注2</sup>や荒川水系荒川の下平井地区地点のように多くの項目の評価ランクが低い地点もあった。また、北陸の信濃川水系魚野川の小出橋地点のように時期により評価ランクが異なる地点がある一方で、利根川水系霞ヶ浦（西浦）の沖宿地点や利根川水系手賀川の布佐下地点のように年間を通じて評価ランクが低い地点もあるように、その内容は地点により様々であった。

豊かな生態系の確保については、総合評価ランクが最も低い7地点のうち6地点は関東であり、うち5地点はNH<sub>4</sub>-N（アンモニウム態窒素）の評価ランクが低い時期があることが原因であった。

利用しやすい水質の確保については、総合評価ランクが最も低い地点は、関東の河川が28地点中18地点と多かった。

#### （4）今後に向けて

新しい水質指標による調査は、平成19年も引き続き全国で実施している。

今後も多くの住民と連携しながら新しい水質指標による調査の充実を図り、個々の河川を多様な視点で総合的に評価することで、河川に対する住民の理解と関心を高めるとともに、住民の多様なニーズを把握し、きめ細かく対応していくこととしている。

<sup>注1</sup> 永山橋地点の評価が低かったのは「透視度」が原因であるが、これは調査時に出水による濁りが残っていたことが理由の一つと考えられる。

<sup>注2</sup> 評価ランクが低い項目のうち「ゴミの量」は、調査時に出水により流れてきたゴミの量が多かったことが理由の一つと考えられる。

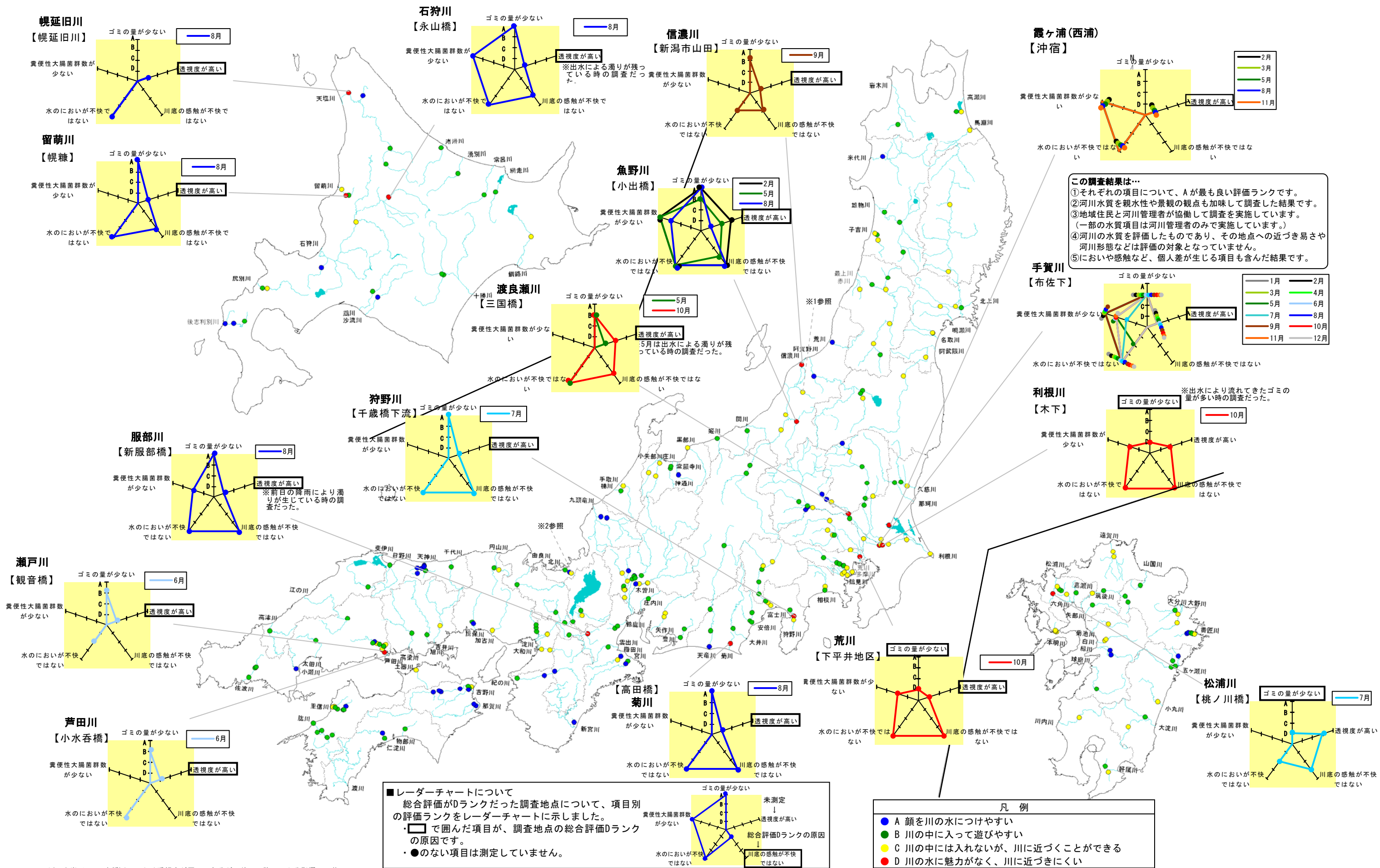


図-9 平成18年「人と河川の豊かなふれあいの確保」調査結果

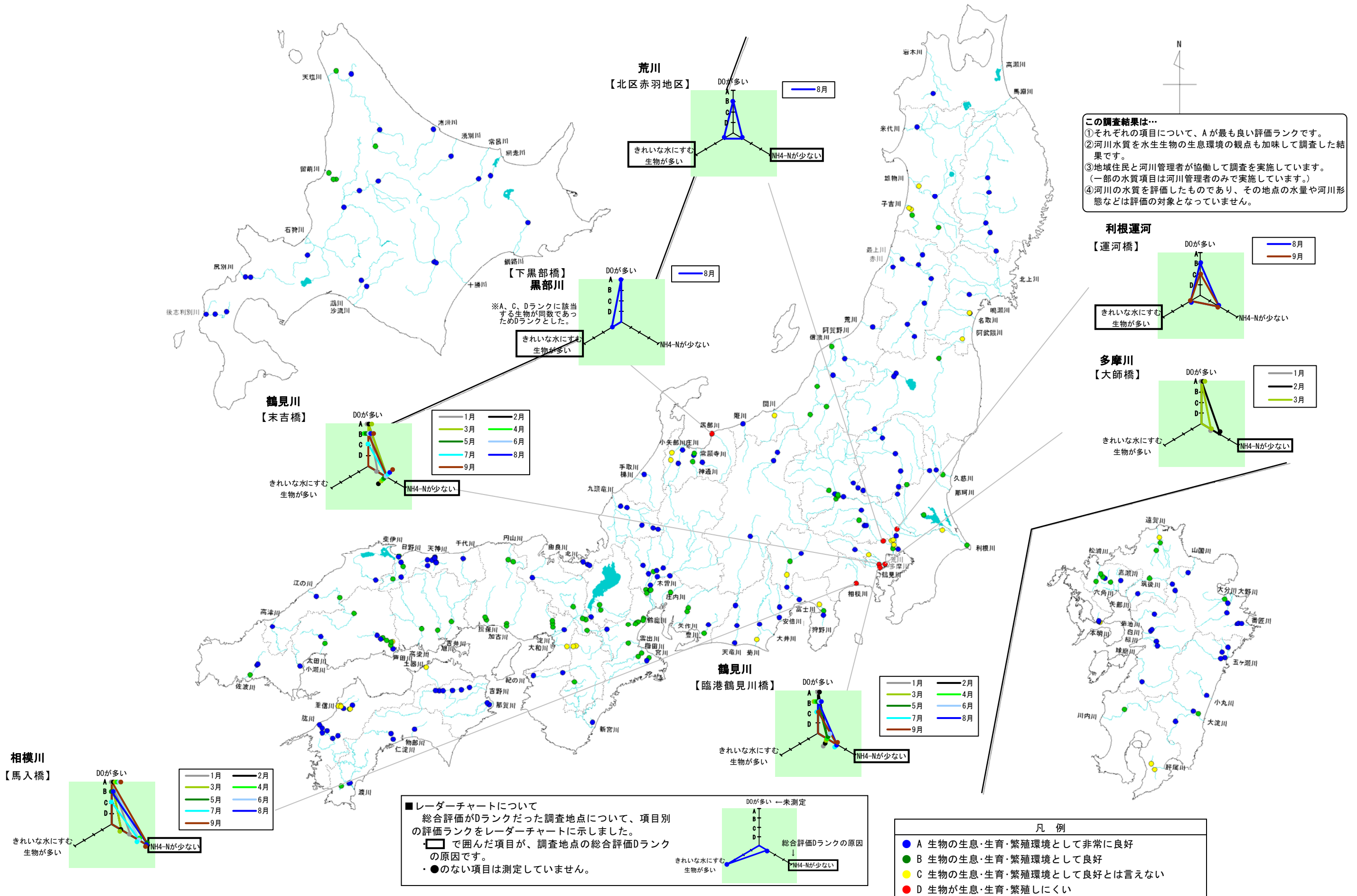


図-10 平成18年「豊かな生態系の確保」調査結果



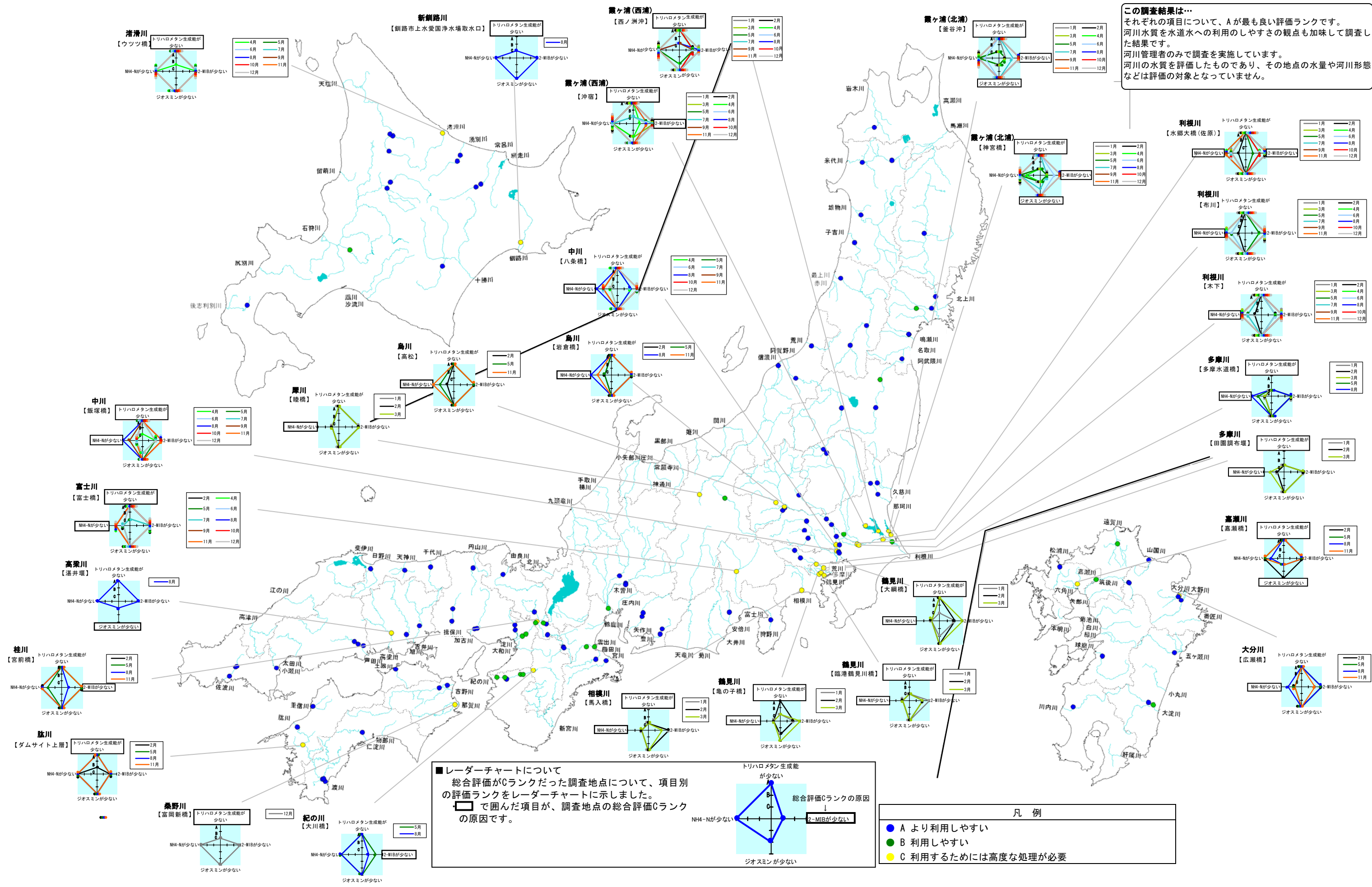


図-11 平成18年「利用しやすい水質の確保」調査結果